

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	益田市立高津中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	大人との対話と比較で磨く「今の私、これからの私」

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動に至る経緯

本校では「総合的な学習の時間」において、地域のリソース（ひと・もの・こと）との協働を意識した「横の繋がり」を大切にしている。また、中学校在籍の3年間にとどまらず、小学校「総合的な学習の時間」の積み上げや高等学校「総合的な探究の時間」を意識し、系統性のある学びを展開できるよう、「縦の繋がり」を意識して日々の学校教育活動に取り組んでいる。

しかし、ここ数年のコロナ禍の下、特に人と出会い様々な価値観や生き方に触れる機会が非常に少なく、生徒自身が「どんな大人になりたいか、どう在りたいか」を考え、行動する機会が失われていた。

そこで今年度は、故郷・高津地区、益田市を選んでUIターンした大人との対話交流活動（1学期）と、近隣の地方都市である広島市を選んでUIターンした大人との対話交流活動（2学期）を実施した。様々な価値観や生き方に生徒自身が触れ「どんな大人になりたいか、どう在りたいか」を考えたり、ふるさと・高津地区、益田市と広島市の大人を比較することから「どのように生きていくか」を考えたりすることとおして、自らが主体的に行動していくためのきっかけを創出するため、以下のように活動を計画・実施した。

2. 活動・研究の目的（ねらい）

- ・生活の本拠地として益田市を選び、日々を生き生きと過ごす大人との対話交流・学習活動をとおして、様々な価値観や生き方に生徒自身が触れ「どんな大人になりたいか、どう在りたいか」を考える。
- ・広島で起業した大人や広島益田会の方々と対話交流・学習活動をとおして、様々な生き方や価値観に触れるとともに、益田市や益田の人との比較をとおして、広島から「ふるさと・高津地区、益田市」の良さや課題を見つめ直す機会とする。
- ・「中学生である私たちには何ができるのか」という視点で、大人と共に地域活動に参画（創出）したり、中学生が地域活動に参加したりしていくためのきっかけとする。

3. 活動内容

（1）活動時期および内容（○教育課程内、●教育課程外）

○6月13日（火）益田版カタリ場

- ・地域の大人との一対一の対話の場づくり
- ・日々を生き生きと過ごしている大人、多様な価値観を持つ大人との対話をとおして、今後の自分自身が何を大切に、どんな行動をしていくかを考えるきっかけづくりをおこなった。

●7月16日（日）ひとまるフェスタ（地域の催し物）へ中学生有志で参画

- ・柿本人麻呂没後1300年祭のイベントに、企画運営側として中学生有志が参画。学校での学びを活かし、公民館を中心とした地域の大人と共に、「どんな地域にしていきたいか」を共有した。

その後、中学生のアイデアを取り入れたイベントブース（地域の農産物を使ったスイーツづくりとその販売）の一つを企画・運営した。

○9月13日（水）地域キャリア体験（～15日）

- ・生徒が市内15～20か所の事業所に分かれて出向き、働くこととおして、事業所の大人の願いや想いに触れる。「お仕事体験」ではなく、対話をとおして自らの生き方を考えるきっかけづくり。



・すべての受け入れ事業所は、事前研修を受け（市教委が実施）、学習活動のねらいや内容を学校と共有して進めた。

○10月6日（金）地域外（広島市）キャリア体験

・生徒が広島市内の事業所（者）に出向き、対話（インタビュー）交流をとおして、事業所（者）の大人の願いや想いに触れた。また、ふるさと・高津地区、益田市と広島市の大人を比較することをとおして、生徒自身が「何を大切にし、どのように生きていくか」を考えた。



●12月3日（日）高津地区文化展へ中学生有志で参画

・7月の地域活動の経験や、9～10月の学校での学びを踏まえ、「自分たちの武器（特徴）を活かして、どのように地域貢献していくか」を中学生たちが主体的に実践。出店したブースでは、家庭科での学習を活かしたメニュー作成から、調理・値段設定・販売などを地区の公民館職員、一部保護者がパートナーとなって企画を実現した。

中学生の参画により、例年以上に来場者が増え、催し全体を盛り上げることができた。



（2）子どもたちへの効果

2024年を迎えた今、本校生徒は学校内だけではなく地域に飛び出して躍動する姿が多く見られるようになってきている。ふるさと「益田市」「高津地区」を選択してIUターンして来られた方との対話交流学習をきっかけとして、パンフレットやネット情報では知り得ない「地域の魅力や課題」に触れることにより、生徒一人ひとりに「何かできないか」という心の火を灯すことに繋がったのではないかと感じる。また、広島に出かけた際にインタビューから得たヒントや、たくさんの「先輩（大人）」の多様な生き方・価値観に触れることをとおして、「自分たちの特徴や武器を活かして何ができるのか」を考え、実践する場所として「地域活動」と結びつけられたことが、生徒たちの力を引き出すことができる新たな「学びのカタチ＝学校の学びと地域での実践の往還」として認識し、大きな可能性を感じている。

活動実施前におこなった生徒アンケートによると、「将来の目標（在りたい自分、職業等）があるか」という質問に肯定的に答えた生徒は約57%で半数であった。自分自身の将来について、あまりイメージを持つことができない生徒が多い様子が窺えた。しかし、12月におこなった事後アンケートでは、同質問に80%以上の生徒が肯定的に回答している。自由記述欄には「たくさんの大人と対話する中で、将来の仕事＝夢ではないということが分かりすぎりした。」「失敗を含めて、たくさんの経験を積み重ねることこそ、なりたい自分になるために必要なことだということが分かった。」「（進学も就職も）どこに行くかではなく、行った先で何をすることが大切という言葉が胸に刺さった」など、対話→熟考→比較→価値観の再構築という一連のサイクルの中で、それぞれの「これから」について、不安よりも期待を膨らませながら前向きに活動している様子を感じることができた。

また、地域活動と結びつけられたメリットを以下の3点にまとめる。

①「考えるだけ」ではなく「考えたことを実現できる」ということや、地域の方々からシャワーのように感謝の言葉をかけていただけることによって、生徒たちの「自分もやってみよう」「もっとやりたい」という意欲や更なる探究心が呼び起こされている。

②教育課程内の取組だけではどうしても時間の制約を受けてしまう。地域活動では何度でも繰り返して挑戦できるだけでなく、その道（分野）のスペシャリストから専門的な知識や技能を学ぶことができる。

③地域活動が「総合的な学習の時間」をとおして教育課程内の各教科の学びとも結びつき、教科学習への取り組み方にも良い変化を感じている教員も多い。「何のための学習か」「どんな場面で使うのか」が体感できる場の意義は非常に大きい。

今年度の取組にはたくさんの地域の方々、学校外の大人に参画していただいた。その背景としては、益田市教育委員会の派遣社会教育主事のコーディネートをを受け、「中学生と一緒に活動したい方」と繋いでいただいたことが大きく関わっている。協働する方とのWin-winの関係を意識しながら授業のオーガナイズをしていくことによって、お互いの活動のねらいや主体性が担保された活動を創ることができた。

主体的かつ対話的に深く学ぶこと、また探究的に学んでいくことの重要性が叫ばれているが、時間的制約を受けやすい学校だけで抱えるのではなく、学校外に学びの場（実践の場、挑戦の場）を整えていくことの重要性に、今年度の活動をとおして気がつくことができた。また、最後に、今年度の本校の取組を支えていただいた、ちゅうでん教育振興助成に感謝するとともに、引き続き子どもたちの豊かな学びの場づくりに邁進していきたい。